

黒髪は、戻らない

—【考察】江戸時代の「白髪染め薬」—

本音はやっぱり白髪を隠したい？

(株)リクルート ホットペッパービューティーアカデミーが20～69歳の男女を対象に実施した「白髪・グレイヘアに関する意識調査2022」¹⁾によると、白髪染めを始めた年齢は、男性が平均39.8歳、女性が平均42.6歳であるという。近年、とくに女性を中心に、グレイヘア(白髪を染めず活かすヘアスタイル)を肯定的に捉える風潮が広がっている。しかしながら、同調査の「白髪の男性/女性へのイメージは?」の質問に対する回答結果をみると、男性視点・女性視点による多少の差異はあれ、依然として白髪=老けてみえるという印象が根強いのは明らかだ。しかも、全体の6割強が身嗜みとして白髪染め(おしゃれ染め含む)の必要性を感じている。

今日、白髪を染めるアイテムは種類・色数共に豊富に展開するが、白髪染めの商品化が史料上に認められるようになるのは江戸時代のことである。紅ミュージアムの収蔵資料に、文久元年(1861)板の「白髪染め薬」の引札(チラシ)がある[図版1]。江戸時代の白髪染めとはどのようなものだったのか、その一端が引札の文面からみえてくる。ただし、当時の引札には誇張表現の多用が珍しくなく、以下、この点を考慮しつつ、なるべく事実を拾い上げていくとしよう。

考察1,引札の効能書きより

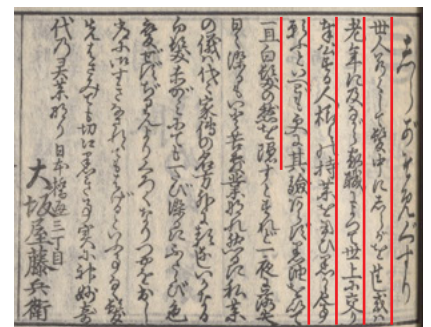
江戸時代の引札は、ビジュアル要素の強い今日の広告と異なり、商品の由来や効能、使用方法といった文字情報が主体である。引札「白髪染め薬」では、商品名と販売価格(男女別・薄毛の男女別で4種設定)、効能、染め方、製造・販売元、これらに加え、毛生え薬「髪生散」の広告を盛り込む。白髪や薄毛といった頭髪問題が切実になる年齢層をターゲットにした戦略性がうかがえる紙面構成である。

製造・発売元の大坂屋藤兵衛(所在地:日本橋通三丁目)は、文政7年(1824)刊行のショッピングガイド誌『江戸買物独案内』に広告出稿が認められる[図版2]。ちなみに、明治時代に朝日新聞へ出稿した同店の広告²⁾では、元禄3年(1690)以来の白髪染め薬の開祖であると、自らの由緒を主張している。

さて、効能書きによれば、大坂屋が製する白髪染め薬は、世にいう「黒油」のように効果が「一夜に落失^{おちうせ}」たり、「風呂にて解け炎天^とに流て顔中又は衣服をよごす^{ながれ}」こともなく、髪のコまで黒く染まり長持ちするという。黒油とは、『日本国語大辞典』に「黒色の鬢付油。白髪染めに使う油」とあり、用例に雑俳「黒油とろりと老の女郎買」(寛延3年・1750)を引く。「とろり」と表現するからには、この黒油が粘性の液状と察しがつく。ただ、別の資料では練り状の黒油



[図版1]
引札「白髪染め薬」文久元年(1861)板 当館蔵



[図版2]
『江戸買物独案内』より大坂屋藤兵衛白髪染め薬の広告。文政7年(1824)刊 国立国会図書館蔵
※傍線は筆者による

【特集】

黒髪は、戻らない

—【考察】江戸時代の「白髪染め薬」—

【ご案内】

●エデュケーション・レポート9

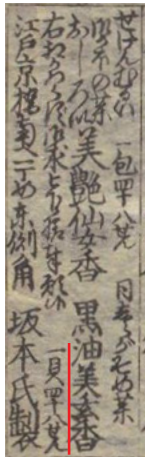
●テーマ展示

「源氏絵のなかの雛祭り」開催中

「平成のギャルメイク — 伊勢半コスメも

みんなキラキラでピカピカだったころ」開催

●講座 最新情報



合巻『伊勢海道銭懸松』刊記より抜粋
文政13年(1830)刊
国立国会図書館蔵

も見出せる。左掲図版は、文政期(1818-30)以降に頻出する「黒油美玄香」という白髪染め薬の広告だが³⁾、ここに「一貝四十八せん」と単価が記してある⁴⁾。当時、軟膏薬などの練り物は貝殻に入れて販売した。つまり、「一貝」とは内容品が練り状であることを意味する。黒油美玄香は、油脂に油煙や真孤墨などの黒色の粉末を練り合わせたものと推察され、この類がいわゆる「黒色の鬢付油」であった。黒油の「風呂にて解け炎天に流て」しまうという製品上の欠点は、多少の誇張はあれ、融解温度の低い油脂を使用したものであったならば有り得ないことではない。

また、「一夜に落失」とあるように、黒油はあくまで一時的な染毛料であり、髪を表面をコーティングして簡便に白髪隠しができる、今日でいうところのヘアマスカラに近い代物といえるだろう。なお、滑稽本『浮世風呂』(文化6-10年・1809-13)三編巻之上に、「黒油ではげつちよう(禿げを嘲った言い方)を隠してさ」とあり、どうやら黒油は禿げや薄毛部分を隠すためにも使用されたようだ。

考察2, 引札の「染様」より

引札の中央部「染様」の文面から、白髪染め薬の使用方法和薬の特徴を推し量ることができる。要約すると次のとおり。

- ① 髪をよく洗い、髪油を落とし、乾かす。
- ② 「煎汁」を用意する。
- ③ 耐火性の焼物(土鍋か茶碗)に「黒き粉薬」を一服入れ、火に掛け、「塩」をひとつまみ加えて掻き混ぜながら熱する。
- ④ ③に②の「煎汁」を少しずつ加えていき、粘りが出てきたら火から下ろす。★ここで染毛剤の完成
- ⑤ 冷めないうちに④の染毛剤を筆に取り、髪の生際より塗っていく。塗り終わったら反故紙で覆い、さらに手拭で包んで一時置く。
- ⑥ 手拭を解き、反故紙を湯で湿らせたのち、再び手拭で包む。
- ⑦ 反故紙が乾いたところで、髪をよく洗い、薬剤を落とす。※洗い方が不十分だと髪が粘つく。

この手順で二度染めを行えば、「何^{いか}ようの白髪にても芯まで黒く染まり」、さらに「艶を出す」とある。なお、赤毛(赤味を帯びた髪)であれば一度で十分に染まるといえる。

上記によると、「黒き粉薬」=白髪染め薬のほか「煎汁」と「塩」が必要である。いずれも家庭内で用意できたものと考えるのが妥当であるから、「煎汁」は煎茶を濃く煮出した汁だろう。より厳密に言えば、煎汁中の可溶性成分タンニンが必要だったのではないか。おそらくこの薬は、衣類の黒染めやお歯黒の原理に同じくタンニン鉄を作り出すもの、すなわちタンニンと反応する鉄粉から成る粉末だったと思われる。あるいは、煎茶成分の浸出条件が一定でないことを考慮し、鉄粉に五倍子や矢車倍子といったタンニン成分を含む染料の細粉を混合した「黒き粉薬」であったかもしれない。そして「塩」は、鉄粉の腐食、つまり黒錆(酸化鉄)の発生を促進するためのものだったと推察する。毛髪はタンパク質であるから、大坂屋の白髪染め薬が

鉄媒染を利用したものならば、黒く染めることは可能だったと思われる。ただし、大坂屋がアピールするように髪のコまで黒く染まったのか、またその効果が持続したのか、この点に関しては疑問が残る。

ところで、白髪を染める前に髪のコを洗い落とし、乾燥させる点は現在も変わらないが、江戸時代は大概の家庭に風呂がなく、洗髪料も手製、こと女性にいたっては長い髪を洗い乾かすにはかなりの時間と労力を要した⁵⁾。染毛剤を塗り終えたあとの待ち時間「一時」は約2時間に相当し、追加の蒸らし時間もある。その上で二度染めを推奨するのであるから、全工程を終えるには少なく見積もって6~7時間はかかったのではないだろうか。忍耐が求められる白髪染め薬であったことは間違いない。

白髪を染める理由も隠す方法も昔から変わっていない

前掲図版2の傍線部では、商品宣伝の前置きとして白髪染め利用者の実情を語っている。「若くして白髪を生じ」た者(若白髪)や、老年であっても「家職によりて世上に交り奉公する」者(家業従事者)が、「様々の持薬」に頼って白髪が黒くなることを願ったり、黒油で白髪を隠したりしているという。江戸時代においても、年齢・性別を問わず世間の目が白髪を染める動機となっており、それがまた、身嗜みとして白髪染めの必要性を認識させる要因となっていることが見て取れる。

ここにいう「様々の持薬」の具体を示すには紙幅が足りないが、文化10年(1813)刊の化粧指南書『都風俗化粧伝』では、「若白髪を治す薬の伝」という項目を所収する。これによれば、胡桃を擦り潰し、白髪を抜いた毛穴に擦り込めば黒髪が生じ、再び白髪は生えてこないそうだ。一笑に付するのは早い。胡桃には毛髪に有効とされる栄養素が含まれており、薬効の点に限って言えばあながち間違っていないのである。ただ、栄養素の吸収には、擦り込むより食すほうが効果的であったと思われる。

冒頭で触れたように、現代は白髪を隠すための選択肢が豊富にある。だが、詰まるところ白髪対策は「染めて隠す」以外になく、江戸時代に比べれば薬剤の効果は進展したものの、白くなってしまった髪がかつてのように黒く戻るわけではない。人生100年時代、人によっては白髪と共に(ある時点までは隠しながら)過ごす時間のほうが長い場合も十分に有り得る。今後ますます黒髪であることは若さの象徴になっていくのかもしれない。ただしそれは、老いを否定するものではない。

1) 詳細な調査結果は下記を参照。
https://www.recruit.co.jp/newsroom/pressrelease/assets/20220908_beauty_01.pdf

2) 朝日新聞(東京版)明治21年(1888)7月10日「開祖しらが染調製所 川上」の広告。大坂屋藤兵衛は、明治以降、川上姓を名乗った。同店は明治20~30年代にかけ、朝日新聞や読売新聞にたびたび出稿している。

3) 広告出稿者の坂本氏は、白粉「美艶仙女香」の製造・発売元として有名だが、黒油美玄香も同店を代表する商品として販売された。なお、当該広告出稿時の所在地は江戸京橋南一丁目だが、天保6年(1835)には南伝馬町三丁目へ移転している。

4) 一時期、単価表記が混在しており、「一貝」ではなく「一包」とする広告も見られる。当初、粉薬であったものが練り薬に変わった可能性も否定できないが、管見の限り、「一貝」表記を採用した例のほうが多く、「一包」は誤記だったのではないかと推察する。

5) 江戸時代の洗髪事情の詳細は、本誌vol.150特集を参照。

学ぶ・楽しむ

紅ミュージアムのいろいろ

教育普及事業の一環として、紅ミュージアムでは2019年度より出前授業の実施に力を入れています。2019年の春に出前授業の案内チラシを作成し、近隣の学校へご案内したほか、紅ミュージアムがある港区や、伊勢半本店の戦後復興のシンボルとも言える蔵がある墨田区、そして東京都や文部科学省に出前授業のプログラムを登録したことで、広く先生方へ知っていただけるようになりました。



紅ミュージアムの出前授業は「伝統の赤、紅を知ろう—つくる技とつかう心—」というタイトルで、前半は【スライドレクチャー】、後半は【紅の体験】で構成されています。

【スライドレクチャー】では、紅花から玉虫色の紅ができるまでの「紅づくり」や「江戸時代の化粧文化」、また「魔除けの紅」についてスライドやワーク

シートを使用して解説します。【紅の体験】は「紅点し体験」・「お守りづくり」・「紅染め体験」から選ぶことができ、授業の目的などに応じて学校に選んでいただいています。いちばん人気は「紅染め体験」です。染液を作るために紅花の花びらから赤色素を抽出する工程は、前半のスライドレクチャーで学んだ「紅づくり」の復習になります。完成した染液で、輪ゴムやビー玉で模様をつけたハンカチを染めます。

学校が出前授業を取り入れる科目や単元はさまざまです。特に社会科や図工・美術、家庭科での実施が多く、伝統文化や技術を学ぶ単元にあわせて実施したい、日本史で江戸時代から明治時代への移り変わりを学ぶ時期に実施したいなど、授業の位置づけが明確な場合もあります。基本はクラス単位となりますが、学年集会での実施や、学年混在の探究学習でのご利用などもあります。



スライドレクチャーの様子

出前授業の対象は小学校～高等学校としていますが、ご要望があれば、放課後児童クラブや特別支援学校などでも授業を行っています。

チラシを作成した2019年度は7校のご利用があり、その後、新型コロナウイルス感染症の拡大により当館も臨時休館、出前授業の実施も一時的に停止しました。2020年の秋以降再開し、2020年度（下半期



「紅染め体験」の様子。酸性・アルカリ性の性質を利用する染液づくりは、まるで理科の実験のようです。



輪ゴムやビー玉を外し、模様が現れると歓声が上がります。

のみ）は7校、2021年度は18校、そして2022年度は22校（小学校4校・中学校7校・高等学校7校・その他4校）と、年々ご利用が増えていっています。規模が小さい当館は一度で受け入れられる人数が少なく、学年やクラス単位での学校受け入れが困難であったことから、それではこちらから出向いていこうと始めたのが出前授業でした。それが、2020年の秋以降、新型コロナウイルス感染症拡大の影響でさまざまな学校行事を中止せざるを得ない中、何か児童・生徒たちに楽しい体験をさせてあげたいという先生方からのご要望で、このように件数が増えていきました。

ミュージアムに来館されるお客様と違い、出前授業に参加する児童・生徒さんの中には、紅に興味がない子や、授業に乗り気でない子がどうしてもいます。ただ、そんな時こそ私たちの腕が鳴り、興味がない子どもたちも夢中にさせたい、紅について何かひとつでも知って帰ってもらいたい、という想いで授業をしています。出前授業に参加した子どもたちが、後日、ご家族を連れて紅ミュージアムに来館してくれることもあります。授業で学んだことを誇らしげにご家族に説明している様子に、いつも心が温まります。

2019年度からこれまで、2,000名を超える児童・生徒の皆さんが出前授業を受けてくれました。これからも、出前授業をはじめとした教育普及事業を通して、地道に「紅」の裾野を広げていきたいと思っています。

《出前授業の実施を検討されている先生方へ》

上記の内容を基本としてプログラムを準備していますが、授業を取り入れる科目や単元に応じて、内容をご相談いただくことが可能です。オンライン授業も対応しています。ご相談・ご質問がありましたら、伊勢半本店webサイトのお問い合わせフォームより種別「教育普及事業について」をご選択の上、お問い合わせいただくか、紅ミュージアムまでお電話ください(03-5467-3735)。

また、伊勢半本店webサイトの「紅ミュージアム」カテゴリの「教育普及」ページで、出前授業の動画や過去の実施一覧をご覧いただけます。同ページからチラシ（裏面が申込用紙）をダウンロードしていただくことも可能です。

テーマ展示「源氏絵のなかの雛祭り」 開催中

2023年1月31日(火)～4月8日(土)

戯作者柳亭種彦(1783-1842)の人気長編小説『にせむらさきいなかげん源氏』を題材にした浮世絵のことを「源氏絵」といいます。『田舎源氏』のヒットに連動して、本作の挿絵が多色刷りの浮世絵として販売されるようになり、さらに作中の人物や場面の見立絵、風俗絵など様々な趣向の源氏絵が版行されました。

今回取り上げるのは、雛祭りの様子を描いた幕末期の源氏絵です。折しも江戸では、七、八段の豪華な雛飾りがみられるようになります。黒漆塗に金蒔絵の雛道具が並ぶ雛壇、美しく着飾った登場人物たち、源氏絵を通して庶民女性の理想の雛祭り像を紹介します。



「源氏十二月之内 弥生」三代歌川豊国画 安政2年(1855)

テーマ展示「平成のギャルメイクー伊勢半コスメもみんなキラキラでピカピカだったころ」

2023年4月11日(火)～7月22日(土)

「Y2Kファッション」が、Z世代と呼ばれる20代前半の若者を中心に世界的に注目されています。Y2Kファッションとは、2000年代に流行した厚底ブーツや、ミニスカート、ぴったりサイズのトップスなどを現代的な要素や新素材を取り入れてアレンジしたファッションです。メイクでもラメやパールを使い、Y2Kを意識したポジティブで明るくキュートな色使いが流行するなど幅広い分野で受容されています。

当時、伊勢半もキラピカでケミカルな色使いのコスメを数多く発売しました。制約の多い現代に再び脚光を浴びているY2Kメイクを、伊勢半製品を通して振り返ります。



キスマーポップドロップ キラキララメパウダー 平成12年(2000)

講座 最新情報

《浮世絵版画ワークショップ開催》

2023年2月18日に「浮世絵版画ワークショップ」～細工紅で春を摺る～を開催しました。江戸時代末期の創業以来160年以上、伝統の江戸木版画の制作を続けている高橋工房代表の高橋由貴子氏に講師をしていただきました。

講座では、まず彫りから摺りの版画制作の工程について映像を見ながら解説していただき、その後、誰も一度は目にしたことがある有名な浮世絵の復刻作品を使い、ぼかしや空摺り、雲母摺りなどの技法を教えていただきました。

その後はいよいよ摺り体験。午前の親子の回では、子どもたちは春の訪れを感じるクローバー柄のノートカバー、保護者はポストカード2種を、午後の一般の回では、桜と楓、そして縞文様の祝儀袋をいずれも多色



摺りで作りました。湿らせた版木に絵具と糊をのせ、それを竹製のブラシでのばし、見当を頼りに和紙を版木に置いてバレンを使って摺ります。一度目の摺りでは、均一に力をかけて摺れなかったためにかすれが出たり、和紙をついで手で押さえてしまい汚れがついてしまったりしましたが、二度目の摺りでは、コツをつかみきれいに摺れている方が多かったです。版木から和紙を外す瞬間は、皆さん緊張の面持ちでした。

絵具には、伊勢半本店が作る「細工紅」も使いました。江戸木版画と紅、伝統的な手仕事の味わいを感じられる講座となりました。



子どもたちがノートカバーを摺る様子



一度目の細工紅の摺り上がりを確認し、二度目の摺りを準備

● 講座開催に関する最新情報は、伊勢半本店webサイトやSNSで随時お知らせいたします。メールでのご案内をご希望の方は、同webサイトのお問い合わせフォームよりお申し込みください。種別「講座・イベントについて」をご選択、必須項目をご入力の上、内容欄に「講座情報希望」とお書きください。



紅ミュージアム
BENI MUSEUM

Presented by
KISSME

開館時間 / 10:00-17:00(最終入館は16:30まで) ※短縮開館等の変動あり

休館日 / 毎週日・月曜日・創業記念日(7月7日)・年末年始

入館料 / 無料 ※ただし、企画展観覧は有料

アクセス / 地下鉄 東京メトロ銀座線・半蔵門線・千代田線「表参道」駅下車 B1出口(階段)より徒歩12分 / B3出口(エスカレーター・エレベーターあり)より徒歩13分

バス 渋谷駅東口バスターミナル 51番乗り場 都01新橋駅前「南青山七丁目」停留所下車

〒107-0062 東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL.03-5467-3735

最新の情報は当館webサイトでご確認ください。 <https://www.isehanhonten.co.jp>

